日本倶楽部会報

平成 26 年 11 月　第 2 号

宮本四郎副会長

「誇り高き日本倶楽部を」

宮本　四郎　副会長

先日、広報委員長が見えて、倶楽部会報の第二号に掲載するから何か書いてほしいとの依頼があった。倶楽部会報の第一号は、既に会員各位の御手許に届き、御一読頂いたと思うが、短いけれども内容の濃い将来性をはらんだ立派な出発だと感じた。その責任者の御依頼とあっては勿論断わることはできない。しかし、ペンをとると先ず何を中心のテーマに置くべきか、あれこれ思案させられた。その結果、たどりついたのが「誇り高き日本倶楽部」という言葉である。
主語はこれとして述語は何にしようか。私の手許にはもちろん一案があるが、皆さんそれぞれ御意見がおありだろうから、これというわけにもいかない。そこで会員各位に考えて頂くことにして「を」で止めることとした次第である。ここで私の意見を申しあげると「しっかりと受け継いでいこう。」とか「しっかりと護っていこう。」ということである。

次は日本倶楽部とは何かである。解答を求めようと思へば電子計算機で日本倶楽部のホームページを開ければよい。一通り揃った情報が出てくる。しかし大分年期を経たものという感じがする。さらに手に取って見ることができるパンフレットもある。基本的なデータは皆入っている。だが、これを初めて見た人が、それではすぐ日本倶楽部に入会したいと思うだろうかと聞くと、答えは出てこないのではないかと思う。他に参考となる文献があるかといえば書かれたものは余りない。しかし、その中で燦然と輝くものが一つあった。今から１５年前、当時の鈴木俊一会長が周辺の諸資料を収集して編纂された「日本倶楽部百年史」である。　私は今回当倶楽部の新法人移行に際して改めて何度も読み直して感激した。折角だから創立時の模様だけ引用させて頂きたい。

鈴木会長の百周年記念祝賀会挨拶の冒頭部分である。「明治三十年十一月二十八日、近衛篤麿(あつまろ)、岡部長職(ながもと)、鳩山和夫の三氏主唱のもとに、小村寿太郎、中村元雄、奥田義人(よしんど)、金子堅太郎、岡田治衛武、松岡寿(ひさし)などの諸氏がこれに加わり、星が岡茶寮において、日本倶楽部設立の話し合いが持たれ、以後、これらの諸氏を中心に相談が重ねられ、十二月十日に「日本倶楽部設立趣意書」が発表されました。その趣意書によりますと、『人生の業務は各々その途を異にし、千差万別なりと雖も、その国利民福を増進せんと欲するは、即ち一なり。故に吾人はつとめて社交上の親和を図り、その目的を達せざるべからず。顧みるに我国と世界列国とは、今や修好日に加わり、外人の来遊するもの少なからず。この時に当たり、内は我が邦人の親和を図り、外は外人との交際を密にし、彼我情交の通融を議する機関を設くるは、けだし刻下の急務に属す。これ、日本倶楽部を設立せんと欲する所以なり。』とありました。」

引用はここまでとさせて頂くが、このあと設立準備は順調に進行した。翌明治三十一年六月六日貴族院議長官舎において発起人総会が開かれ、会長に岡部長職、副会長に長岡護美(もりよし)及び渋沢栄一氏が選出され、麹町区有楽町の地に仮会館を設立、七月一日開館となった。時期は日清戦争勝利の後で国全体の意気上り、当倶楽部は政・官・財界の要人綺維星の如く百名余りの発会となった。当時議会には議員会館なく、当倶楽部はこのような方々の溜り場となり、実質的な「組閣本部」の役割を果したと書かれている。爾来歳を経ること１１６年。

この間わが国は日露戦争、関東大震災、満州事変、日中戦争、太平洋戦争、敗戦と占領軍の管理行政、平和条約調印、経済復興と発展の激動の世紀と栄枯盛衰を重ね、今日世界の中でも主要国の一つとなった。これひとえに先人の血と汗の結晶であって、その後を受けつぐ我々の責任はまことに重いといわなければならない。
これに対して現役の我々が何を為すべきか、会員各位も日頃御考えのことと思うが、私が思うことを三点ばかり書き述べて結びとさせて頂きたい。

先ず、第一は「当倶楽部の目的は何か」である。これは始めに引用させて頂いた日本倶楽部設立趣意書の冒頭に簡潔明瞭に書かれているので、ここではその周辺のことにふれてみたい。辞典を調べてみると「倶楽部」とは、「CLUB」で、主としてアングロサクソンの間で社交機関として発達した団体を指すと書かれている。私事にわたって恐縮であるが、私は今から６０年程前に在連合王国日本国大使館の書記官として四年間在勤したことがある。戦後十年余りしか経たない頃で対日感情はなお険悪であった。私は職務のかたわら、イギリスがヨーロッパ大陸から離れた島国でありながら、世界の三分の一を占めるイギリス連邦王国の盟主となることができたのは何故か、何とかして知りたいと思って過していた。当時日本国大使館はハイドパークの南に近いベルグレイブ・スクエアーにあった。戦前もこの地にあり、近辺には他国の大使館もあって由緒ある高級住宅街である。私が毎日前を通っているビルの上階にクラブがあって、エリザベス女王陛下の御夫君であられるエディンバラ公爵、フィリップ殿下がまだ御結婚前によく御出かけになったとローカルの館員から聞いたことがある。もう一つ、イギリスに社交クラブらし

いものが出来たのは十七世紀頃で、それが十八世紀になって次々と拡がっていったといわれる。その頃ドクター・ジョンソンという傑物がロンドンに現われ、毎週一回居酒屋で食事をし、文学談議からあらゆるテーマに花を咲かせ、その時代の作家、芸術家はいうに及ばず第一級の名士と一緒に談論風発し、酒を嗜んだということである。当時のイギリスは産業革命、農業革命に直面し、その上アメリカに植民地の独立戦争等の大問題を抱え、さらにヨーロッパ大陸ではフランス革命があり、やがてナポレオンが現われて、いわゆるナポレオン戦争へとつながる大変動期の真っ只中にあった。イギリスはこのような内憂外患を抱え、さぞかし悪戦苦闘したことと思う。しかし、終ってみれば見事にこの修羅場を切り抜け、世界の覇者として躍り出ることとなった。何故イギリスが困難を克服することが可能であったか。私は指導階級の賢明な政策を利害の対立する貴族階級、新興富裕階級、農民代表、労働者代表等に納得させ、さらに議会制度を味方につけて国論を統一することに成功したからではないかと思う。それにしても、危機を迎えると正論に耳を傾け、一致団結して敢然と困難にも立ち向かう英国国民の姿勢に敬服するものである。その大きな流れに居酒屋の政治論議が与って力があったのではないかと私はひそかに想像するのだがどうだろうか。

第二は優れた組織は長く続けるべきだと思う。古来長くなればなる程光を増してくるもののようだ。現に有名な大学は創立が古い。例えばオックスフォードは１２世紀、ケィンブリッジが１２０９年、ハーバードは１６３６年、エールが１７０１年、パリ大学（ソルボンヌ）１２世紀、ハイデルブルグが１３８６年等である。有名な寺院はもっと古い。ローマのサンピエトロ寺院は４世紀に始まり二代目が１６２６年。法隆寺も６０７年、東大寺は７４３年等々がある。日本倶楽部の１１６年も立派だと思う。しかし、日本はこれからが正念場だ。もう１００年は頑張らなければならない。

第三は、組織は何といっても人に始まり人に終る。日本倶楽部の会員名簿を見ると、この国の政界、官界、法曹界、財界等を通じて著名な方が名を連らねておられる。私は今年の１月１９日当倶楽部の評議員会に出席して、その頃盛んに勉強していた当倶楽部の活性化を図るための具体策と会員増強対策について執行部の考え方を説明したことがあった。説明が終り議長の「何か御質問があればどうぞ」との発言を受けて、評議員の元参議院議員・下稲葉耕吉会員が手をあげ質問を始められた。日頃余り発言されない方であるが、私の親友が下稲葉会員の七高以来の友人であったから前から存じあげていた。何をいわれるのかと緊張して伺った。発言はしばらく続いたが、一言でいうと、「当倶楽部を活性化し、魅力ある日本倶楽部として会員を増強することは結構である。問題は会員の質である。この倶楽部の光栄ある百年の歴史と伝統を受け継ぎ発展させていく人材を集めよ。」ということであった。私は勿論賛成なのでその旨答弁をした。ただ誤解を招き易いので、一言申し添えておきたいことがある。それは当倶楽部の入会承認の基準がややもすると高位高官者で可成りの年配者が多かった嫌いがあった。高齢の方も勿論結構であるが、現役や退官間もない若い方の中にも、立派で適格な人が沢山おられることも事実である。よって今後は適格者であれば若い人もどしどし入会して貰って会員増強に努力することが重要であると考える。下稲葉会員も大賛成であられることと信じている。ところが下稲葉会員はそのすぐ後二月十七日突如として逝去された。私達は驚いた。あれは下稲葉会員の当倶楽部に対する遺言だったのかと思い、御趣旨に添って努力する所存である。謹んで御冥福を御祈り申し上げる。